

1 単元 私の思いを言葉で伝える～『初雪のふる日』（光村図書4年）～

2 指導の立場

<子どもの実態から>

子どもは、『プラタナスの木』で中心人物の性格や変化、おじいさんの正体を考えることで、作品の魅力を捉えた。そこでは、変容のきっかけや、自分の考えを支える叙述を基にしながら、内容の面白さだけでなく、読み方の面白さについて自分の考えを形成することができた。また、自分の書いた紹介文を基に魅力を話し合うことで、着目する叙述によって、中心人物の変化や魅力だと感じる部分が違うことを実感してきた。このような子どもが、作品の雰囲気や中心人物の心情の変化について話し合うことで、言葉のもつ意味や表現の工夫を捉えたり問い直したりすることができるだろう。

そこで、単元を構想するにあたっては、次のような教材を設定する。

<教材について>

『初雪のふる日』は、ふと見つけた石けりの輪に足を踏み入れた少女が、雪うさぎの列に入り込んで歩みを止めることができぬまま、幻想の世界に迷い込んでしまう物語である。読者は、「この少女はどうなってしまうのだろう。」と、緊張感や好奇心をもって、場面の様子と登場人物の気持ちを読んでいくだろう。ここでは、物語全体を通して中心人物の心情の変化を考え、他者と比較する。どの場面、どの言葉や表現に着目するかによって、幾通りもの解釈が成り立つことを意識できるようにしたい。

そこで、指導にあたっては、次の点に留意する。

<指導上の留意点>

- 第一次では、どの場面が面白いと思ったのかを心情曲線を基に話し合う場を設定する。そうすることで、自分の考えを形成したり、解釈のずれを認識したりできるようにする。
- 第二次では、心情曲線を基に、自分と他者の解釈を比較する場を設定する。そうすることで、自分が根拠とする言葉や文を捉えたり、他者の解釈を基に自分の考えを問い直したりすることができるようにする。
- 第二次では毎時間、自分の考えの変容とその理由を叙述と結び付けて振り返る場を設ける。そうすることで、叙述に基づいた言葉や表現への捉えを蓄積できるようにする。

3 目標

- (1) 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに共言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語句を豊かにすることができる。 [知] (1)オ
- (2) 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。 [思] C(1)カ
- (3) 言葉のもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとする。 「学びに向かう力、人間性等」

4 well-beingにつながる学びについて

本学園では、well-beingを「個人だけでなく、社会や地球環境まで含めた全体的に良好な状態」と捉えている。well-beingの実現には、教科等の本質に迫る授業で身に付けた資質・能力を、人生において自在に発揮できる子どもを育成することが必要不可欠である。そのためには、エージェンシー（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）の育成及び発揮が重要な課題であると考えている。

本学園の国語部では、述べ方の効果や読後感の要因等を捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めていく授業が、教科の本質に迫る授業だと捉えている。また、エージェンシーを発揮している姿を、言葉への見方・考え方を働かせている学びの過程を自覚する姿だと捉えている。本単元においては、心情曲線を用いて、自分の考えを可視化したり、比較したりする場を設定する。自分の考えを自覚した上で、多様な考えに触れたり、学習を振り返ったりすることで、自分の考えの変容を捉えたり問い直したりする様相がエージェンシーを発揮した姿だと考えている。

このような学習を経験した子どもは、言葉や表現の仕方の面白さに気付いたり、他者との解釈のずれを楽しんだりしながら、自身の言葉への捉えを蓄積してこれからも様々な作品と向き合うことができるようになり、well-beingの実現につながるだろう。

5 指導と評価の計画（総時数 8時間）

次	学習活動・内容	エージェンシーを発揮するための手立て	評価規準・評価方法等
一 ②	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話の大体をつかむ <ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の行動と関係 ・場面分け ○ 物語全体を通した心情曲線を作成する <ul style="list-style-type: none"> ・中心人物の気持ちの変化 ・言葉の意味 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分と他者との感じた印象や疑問の違いを話し合う場を設け、自分の考えを納得させたり、疑問を解決したりできるように工夫して学習に取り組む必要があると認識できるようにする 	[主体的に学習に取り組む態度] <u>ノート・発言</u> ・物語の印象や疑問点について、自分の考えを文章にまとめようとしているかの確認
二 ④ 本時 3 / 4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 心情曲線を基に第一場面の女の子の気持ちの変化を話し合う <ul style="list-style-type: none"> ・しゃがんでいる女の子と石けりの輪を見つけた時の女の子の気持ちの比較 ・情景描写や修飾語への着目 ○ 心情曲線を基に第二・三場面の女の子の気持ちの変化を話し合う <ul style="list-style-type: none"> ・うさぎと出会った女の子の気持ちの比較 ○ 心情曲線を基に第四・五場面の女の子の気持ちの変化を話し合う <ul style="list-style-type: none"> ・おまじないを思い出した女の子の気持ちの比較 ・「ああ、初雪だ。」という台詞から受ける印象の比較 ● 心情曲線を基に第六～八場面の女の子の気持ちの変化を話し合う <ul style="list-style-type: none"> ・第五場面と第六場面の女の子の様子 ・女の子の気持ちが一番上がったところの比較 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 心情曲線を基に自分の考えを可視化することで、どの部分に着目しているのかを自覚できるようにする ○ 他者と考えを共有し、比較させることで、多様な考え方に触れるよさを実感することができるようにする ○ 学習したことを基に振り返らせるで、自分の考えを明確にし、蓄積していくことのよさを実感できるようにする 	[知識・技能] <u>ワークシートへの書き込み</u> ・場面の様子や登場人物の言動、様子などを表す語句に着目し、語彙を豊かにしているかの確認 [思考・判断・表現] <u>ワークシートへの書き込み</u> ・登場人物の行動や気持ちなどについて叙述を基に捉えているかの確認 [知識・技能] <u>観察</u> ・文章全体の構成や内容の大体を意識しながら音読しているかの確認
三 ②	<ul style="list-style-type: none"> ○ 二次で読み取ったことを基にして、紹介文を書く <ul style="list-style-type: none"> ・根拠となる語や文の選択 ・叙述に基づく自分の解釈 ○ 紹介文を読み合った上で感想を伝え合い、学習を振り返る <ul style="list-style-type: none"> ・捉えた魅力の比較 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習全体を振り返ることで、新たに獲得した物語の読み方を自覚し、他の作品の読みでも自ら読み深める態度を養うことができるようにする 	[主体的に学習に取り組む態度] <u>紹介文・ノート</u> ・叙述に基づいて自分の捉えた物語の魅力や文章で表現しようとしているかの確認

6 本時案 ー第二次・4時分ー

- (1) 主眼 第六・七・八場面の心情曲線を基に女の子の気持ちを話し合うことで、変化を表す表現の工夫について自分の考えを形成することができる。
- (2) 準備 ワークシート，板書用本文掲示
- (3) 学習の展開

学習活動・内容（発問）	予想される子どもの反応	指導上の留意点	分
<p>1 第六・七・八場面の心情曲線を比較する</p> <p>心情が変化するときかけはどこか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習への見通し ・変化が分かる表現 <p>2 心情曲線を基に，捉え方のずれが多い部分を話し合う</p> <p>一番女の子の心情が変化したと感じたのはどこか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の意味の捉え ・解釈の違い ・叙述同士や，場面の結び付き 	<p>ア 女の子の頭に「すてきななぞなぞ」が浮かんだところで気持ちが上がったと思うな</p> <p>イ 私は、「よもぎ，よもぎ，春のよもぎ」のところが一番大きく気持ちが上がったところだと思うな</p> <p>ウ いろんなきっかけがありそうだから，友達がどのように考えているのか聞いてみたいな</p> <p>ア 「女の子の体は，だんだん温かくなり…」のところから，気持ちがどんどん上がっていったと思うな</p> <p>イ でも，まだ助かっていないから，そこまで大きく気持ちは上がってないのではないかな</p> <p>ウ 「気が付いたとき…」のところから，うさぎがいなくなって安心したから一番気持ちが大きく上がったと思うよ</p> <p>エ 「もう石けりの輪はなく…」のところから，女の子はまだ状況が理解できていない様子を表していると思うから，ここも一番ではないと思うな</p> <p>オ そのあとに「ああ，助かった。」とあるから，そこでようやく助かったことが理解できたと思うな</p> <p>カ だとしたら，その部分が女の子の気持ちが一番上まで上がったのだね</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の最初に書いた心情曲線を互いに比較させることで，自分と友達の捉えた変化のずれを認識することができるようにする ・意図的指名や「一番と感じたのはなぜか。」「どこからそう思ったのか」を問い返すことで，言葉や表現による解釈の違いについて，多様な考えに触れられるようにする ・着目した言葉と自分の考えとを結び付けて話し合わせることで，叙述に基づいて登場人物の心情を捉えたり，問い直したりできるようにする 	7
<p>3 本時の学習を振り返る</p> <p>一番気持ちが上がったと思うところはどこになるだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たな解釈の形成 ・考えの言語化 	<p>ア 一番は，よもぎを見つけたところだと思っていただけで，友達の意見を聞いて考えが変わったよ</p> <p>イ 「ああ，助かった。」の「ああ」というところから，一番安心している様子が伝わるから，ここが一番かな</p> <p>ウ 友達と比べると感じ方や考え方が違って，参考になるね</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートに本時の学習を通じた自分の考えを記述させることで，考えの変容や新たな視点の獲得を自覚したり蓄積できたりすることができるようにする 	35 45

(4) 評価規準と方法

第六・七・八場面の心情曲線を基に女の子の気持ちを話し合うことで，女の子の気持ちの変化を表す表現の工夫を捉え，自分の考えを形成しているか発言やワークシートから見取る。

<メモ>

1 単元 クライマックスをどう読む？～『海の命』（光村図書6年）～

2 指導の立場

<子どもの実態から>

子どもは、『やまなし』で作者の独特な表現や世界観に触れ、作品の魅力を捉えた。ここでは、場面を対比したり、色や自然などの情景描写の変化を捉えたりしながら、宮沢賢治が描き出した物語の世界について自分の考えを形成することができた。また、作品の魅力を話し合うことで、他者と考えを共有し、比較しながら読みを深めるよさを実感してきた。このような子どもが、作者の表現と読者が受ける主人公の行動に対する印象について話し合うことができれば、今以上に言葉のもつ意味や働きを捉えたり問い直したりすることができるだろう。そこで、単元を構想するにあたっては、次のような教材を設定する。

<教材について>

『海の命』は、作品の序盤で主人公太一の父がクエによって死を遂げることが描かれている。太一がクエへ復讐をするに違いないと考え読み進める読者が多いただろうが、太一はクエを殺さないのである。このようなクライマックスの描き方に対して、読者である子どもは戸惑いを感じるだろう。ここでは、クライマックスとそこに向かうまでの表現に着目し、場面のつながりや太一の描かれ方を捉えることを大切にしたい。そこで、指導にあたっては、次の点に留意する。

<指導上の留意点>

- 単元を貫く課題を「作者の表現は、太一の行動を納得させるものだと感じたか」と設定する。そうすることで、自分の考えを形成したり、他者との解釈のずれを話し合ったりしながら、国語科の見方・考え方を働かせることを意識できるようにする。
- 第二次では、設定した問いに対する解釈を検討する場を設定する。そうすることで、着目した言葉や文が根拠として適切であったか捉えたり問い直したりし、その解釈は適切かを確認することができるようにする。
- 第二次では毎時間、読み方に対しての自己評価する場を設ける。そうすることで、作品のどの部分に着目し、どのように読んだかを自覚し、言葉や表現への捉えを蓄積できるようにする。

3 目標

- (1) 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。 [知] (1)オ
- (2) 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。 [思] C(1)エ
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。 「学びに向かう力、人間性等」

4 well-beingにつながる学びについて

本学園では、well-beingを「個人だけでなく、社会や地球環境まで含めた全体的に良好な状態」と捉えている。well-beingの実現には、教科等の本質に迫る授業で身に付けた資質・能力を、人生において自在に発揮できる子どもを育成することが必要不可欠である。そのためには、エージェンシー（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）の育成及び発揮が重要な課題であると考えている。

本学園の国語部では、述べ方の効果や読後感の要因等を捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めていく授業が、教科の本質に迫る授業だと捉えている。また、エージェンシーを発揮している姿を、言葉への見方・考え方を働かせている学びの過程を自覚する姿だと捉えている。本単元においては、単元を貫く課題を解決するための問いを子どもと教師でつくる場を設定する。子どもと共同で見いだした問いを解決するために話し合ったり、学びを振り返ることで問いの良し悪しを判定し、問いを設定し直したりする様相がエージェンシーを発揮した姿だと考えている。

このような学習を経験した子どもは、言葉や表現の仕方の面白さに気付いたり、他者との解釈のずれを楽しんだりしながら、自身の言葉への捉えを蓄積してこれからも様々な作品と向き合うことができるようになり、well-beingの実現につながるだろう。

5 指導と評価の計画（総時数 8時間）

次	学習活動・内容	エージェンシーを発揮するための手立て	評価規準・評価方法等
一 ③	○ 話の大体をつかむ ・登場人物の行動と関係 ・場面分け ○ 単元を貫く課題の解決に向けた問いをつくる ・主人公の行動への印象 ・作者の表現への納得度	○ 問いを子どもと一緒に見いだす場を設け、子どもが話し合いで解決するサイクルを示すことで、自らが学習の主体であると認識できるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>ノート・発言</u> ・主人公の行動への納得度と作者の表現の関係に着目して、問いをつくらうとしているかの確認
二 ③ 本時 3 / 3	○ 太一の目指した漁師像について話し合う ・お父と与吉じいさの漁の違い ・一人前と村一番の違い ○ 太一がクエをお父だと思ったのは無理やりかを話し合う ・「打たなかった」と「打てなかった」の比較 ・クエに対する物語全体を通じた叙述のつながり ● 結末の3行があることによる印象を話し合う ・「生涯誰にも話さなかった」ことが付け足された印象 ・「もちろん」という語りの印象の違い	○ 関連作品や作者に関する資料を提示することで、教材以外にも興味関心をもって考えやとができるようにする ○ 班での話し合いを中心に考えを形成し、全体で考えを共有することで、エージェンシーが育まれたり、活動のよさを実感したりできるようにする ○ 振り返りで問いの見直しを行い必要な行えば、問いの再設定を行うことで、学びに責任をもち、解決しようとする態度を養うことができるようにする	[知識・技能] <u>教科書への書き込み・ノート</u> ・場面の様子や登場人物の言動、様子などをあらかず語句に着目し、語彙を豊かにしているかの確認 [思考・判断・表現] <u>ノート・教科書・発言</u> ・太一の思いがわかる叙述を関連付けて、クエに対する思いを自分の考えとして捉えようとしているかの確認
三 ②	○ 二次で読み取ったことを基にして、作者の表現は太一の行動を納得させるものだと感じたか自分の考えをまとめる ・根拠となる語や文の選択 ・叙述と叙述とを結びつけた解釈	○ 単元を通してつなげてきた学びを振り返る場を設けることで、新たに獲得した物語の読み方を自覚し、別の作品の読みでも自ら読み深める態度を養うことができるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>紹介文・観察</u> ・太一の行動に納得できる表現になっていたかを、複数の叙述を関連付けながらまとめているかの確認

6 本時案 ー第二次・3時分ー

- (1) 主眼 最後の3行に対する解釈を話し合うことで、太一の行動や心情の表現に対する自分の考えを形成することができる。
- (2) 準備 なし
- (3) 学習の展開

学習活動・内容（発問）	予想される子どもの反応	指導上の留意点	分
<p>1 物語の結末はハッピーエンドに感じるかどうか印象を話し合う</p> <p>『海の命』はハッピーエンドだと感じたか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 結末の印象 <p>2 最後の3行に対する印象を話し合う</p> <p>最後の3行がないと、結末の印象はどうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「村の娘と結婚」「子ども4人」「満ち足りた」などの言葉が与える印象 <p>「もちろん」という言葉から伝わってくる印象はどのようなものか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「もちろん」と感じている人の存在 ・ 「もちろん」の言葉の働き ・ 叙述と叙述とを結び付けた解釈 	<p>ア 子どもも生まれ，母も「満ち足りた」と書いてあるからハッピーエンドだ</p> <p>イ 「生涯誰にも話さなかった」とあるが，その行動の意味によって本当はハッピーエンドではないのかもしれない</p> <p>ウ 作者がこの3行を書いた意味を話し合いたい</p> <p>ア 太一も普通の腕のいい漁師になり，周囲の人も幸せになったのだと思えた</p> <p>イ 今までの太一の葛藤で心が晴々したのだろうという終わり方だと感じた</p> <p>ウ やっぱ最後3行があることで，太一の葛藤が続くように思えるな</p> <p>ア 「もちろん」と書いてあるのはなぜか。それは誰から見て「もちろん」なのか</p> <p>イ 太一が「もちろん」とするのは不自然だろう。これは作者の視点ではないか</p> <p>ウ だとすると，なぜ「もちろん」なのか。誰にも話さないことは太一にとって当然か</p> <p>エ 周囲から「クエは，殺して当然」と思われていたとしたら，太一は殺さない判断をしたことを話せないだろう</p> <p>オ 自分の気持ちを誰にも話さない決断をしたことに苦しさを感じるな</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 結末に着目させることで，本時の問いに見通しをもつことができるようにする ・ 最後の3行がないと仮定して話し合わせることで，この文の印象や文や言葉のもつ意味や意図を考えるという見通しをもつことができるようにする ・ 「もちろん」「生涯」「誰にも」「話さない」と言葉を区切って取り上げることで，それぞれの言葉のもつ印象と働きを捉えることができるようにする ・ 作者の視点からも言葉や文の意味を捉えることで，どのような結末にしたいと考えているのか問い直すことができるようにする 	<p>5</p>
<p>3 読み取ったことを基に自分の考えをまとめる</p> <p>作者がこの3行を書いたことは，太一の行動を納得させるものだと感じたか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 主人公の行動や心情と叙述との結び付き ・ 叙述と物語に対する印象との結び付き 	<p>ア 単純な話とは違うという作者の意図を感じた。だから，「命」というつながりを太一が大切にしようとしたと感じて納得した</p> <p>イ クエに殺されたお父を思い続けていた太一の心情に着目すると，太一の葛藤は消えることはなく，誰かと分かち合えるものではないから，この3行があるとそういう苦しみが残っていることが分かると思った</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 着目した部分を踏まえて自分の考えをまとめさせることで，本時での読みを自覚させ，言葉や文，表現を捉えるよさを蓄積できるようにする 	<p>35</p> <p>45</p>

(4) 評価規準と方法

太一のお父への思いや与吉じいさに教わったことを関連付けながら、「もちろん」「生涯誰にも話さなかった」という言葉の意味を捉えたり問い直したりして、この文の印象について、自分の考えを形成することができたか、発言やノートの記述からみとる。

<メモ>

1 単元 主張を伝えるための効果的な表現に迫る
～『「不便」の価値を見つめ直す』（光村図書1年）～

2 指導の立場

<子どもの実態から>

子どもは、説明文『比喻で広がる言葉の世界』において、事例の働きに着目しながら、筆者の主張を捉える経験をしている。そこでは、説得力のある説明的文章に必要な要素を考えながら、主張を伝えるために筆者が工夫した述べ方について自分の考えを広げてきた。このような子どもが、本単元を通して文章に課題意識をもち、主張と事例とのつながりを検討することができれば、表現の効果について自分の考えを形成し、さらに言葉への自覚を高めていけるだろう。

そこで、単元を構想するにあたっては、次のような教材を設定する。

<教材について>

本教材では、「不便益」という常識とは異なる視点からの問いかけから論を起している。そして、具体的な事例を挙げながら論拠を丁寧に説明し、「常識とは異なる視点をもつことで、世界をもっと多様に見ることができるようになる」という主張を伝えている。ここでは、筆者の挙げた事例の選び方や論の展開の仕方を吟味する活動を通して、主張を伝えるための効果的な表現の仕方について自分の考えを形成できるようにしたい。

そこで、指導にあたっては、次の点に留意する。

<指導上の留意点>

- 第一次では、論の構成を整理しながら主張を捉える活動を設定することで、筆者の述べ方の特徴や工夫に着目することができるようにする。
- 単元を通して、主張に対する説得力の有無について判断型学習課題を検討させることで、表現の効果や論の展開の仕方を捉えたり問い直したりすることができるようにする。
- 第三次では、前時までの判断型学習課題について、理解したことや考えたことを文章にまとめる活動を設定することで、文章の構成や論理の展開、表現の効果を実感することができるようにする。

3 目標

- (1) 単語の類別について理解するとともに、指示する語句と接続する語句の役割について理解を深めることができる。 [知] (1)ク
- (2) 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができる。 [思] C(1)エ
- (3) 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものに行うことができる。 [思] C(1)オ
- (4) 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切に、「学びに向かう力、人間性等」

4 well-beingにつながる学びについて

本学園では、well-beingを「個人だけでなく、社会や地球環境まで含めた全体的に良好な状態」と捉えている。well-beingの実現には、教科等の本質に迫る授業で身に付けた資質・能力を、人生において自在に発揮できる子どもを育成することが必要不可欠である。そのためには、エージェンシー（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）の育成及び発揮が重要な課題であると考えます。

本学園の国語部では、述べ方の効果や読後感の要因等を捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めていく子どもを育成する授業が、教科の本質に迫る授業だと捉えている。また、エージェンシーを発揮している姿を、言葉による見方・考え方を働かせている学びの過程を自覚する姿だと捉えている。本単元においては、「説明的文章を読み深めるために大切にしたい観点」を、既習内容に基づいて設定し、その観点に対する自己評価と本時の課題に対する自分の考えを蓄積していく場を設ける。そうすることで、読者の立場と筆者の意図とを往還しながら、言葉にこだわろうとする様相が見られることを期待する。

このような学習を経験した子どもは、蓄積してきた自身の言葉への捉えを、これからの言語活動に生かそうとするようになり、well-beingの実現につながるだろう。

5 指導と評価の計画（総時数 6時間）

次	学習活動・内容	エージェンシーを発揮するための手立て	評価規準・評価方法等
○ ①	○ 説明的文章を読み深めるために大切にしたい観点を設定する ・既習内容の想起，確認	○ 観点を共有・決定させることで，既習内容を生かして作品を読む意識がもてるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>観察</u> ・既習内容から，学習の見通しをもって考えを提案しようとしているかの確認
一 ②	○ 本文を通読し，初読の感想をもつ ・内容理解 ・構成把握 ○ 要点を整理し，「筆者の主張に説得力はあるか」について意見を述べ合う ・説得力の高さと述べ方の工夫への着目	○ 観点に対する意識をもたせながら作品を読ませることで，課題への自分の考えをもてるようにする ○ 振り返りシートを用いて毎時間の授業の最後に自己評価と考えを蓄積させることで，変容を自覚できるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>観察</u> ・工夫された述べ方を見つけようとし，それを伝え合おうとしているかの確認 [知識・技能] <u>ノート・観察</u> ・主張を支える事例を捉えて内容を理解しているかの確認
二 ② 本時 2 / 2	○ 「本論と主張の結び付きに説得力はあるか」について検討する ・述べ方の特徴 ・表現の効果 ● 「事例と主張の結び付きに説得力はあるか」について検討する ・事例の順番 ・事例の選び方	○ 振り返りシートからみとれる変容を価値づけることで，形成した考えをその後の学習につなげられるようにする	[知識・技能] <u>ノート・観察</u> ・指示する語句と接続する語句の役割について理解しているかの確認 [思考・判断・表現] <u>ノート・教科書・発言</u> ・文章を読んで理解したことに基づいて，自分の考えをまとめているかの確認
三 ①	○ 「筆者の主張に説得力はあるか」について，自分の考えをまとめる ・述べ方の工夫に対する自分の考えの形成	○ 単元を通してつなげてきた学びを見返しながら活動させることで，目標を設定して学習することのよさや必要性を感じられるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>ノート</u> ・今までの学習を生かして，粘り強く述べ方の工夫を見つけ，その根拠・理由をまとめようとしているかの確認

6 本時案 ー第二次・2時分ー

- (1) 主眼 事例が、主張とどのように結び付いているかを吟味する活動を通して、主張を伝えるための効果的な表現について、自分の考えを形成することができる。
- (2) 準備 教科書、ノート、スクリーン、タブレット端末、振り返りシート
- (3) 学習の展開

学習活動・内容（発問）	予想される子どもの反応	指導上の留意点	分
<p>1 前時の学習を振り返る</p> <p>本時の目標や、本時で学びたいことは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> 既習内容の想起，確認 目標の確認 	<p>ア 目標で決めたように，説明文を読むときには，主張と事例に筋が通っているかを考えながら読みたい</p> <p>イ 初めて読んだ時，とてもわかりやすい文章だと思ったけれど，それは身近な事例から，主張に納得できたからだ</p> <p>ウ 事例と主張がどのように結び付いているか，みんなの考えを聞いてみたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> 単元の初めに設定した説明的文章を読み深めるために大切にしたい観点を確認したり，初読の感想を紹介したりすることで，意欲的に学習を進めることができるようにする 	5
<p>2 判断型学習課題を用いて，事例と主張との結び付きを吟味する</p> <p>事例と主張は結び付いているか</p> <ul style="list-style-type: none"> 事例の順番 事例の選び方 	<p>ア いる。筆者自身が「常識とは異なる視点」をもって生活したからこそ「不利益」に気付いたことが，事例から伝わってくる</p> <p>イ いる。事例3は専門的な内容だけど，その前に中学生にとって身近な事例1，2が述べられているおかげで，主張が理解しやすい。読者に配慮できるのは，筆者が物事を多様に見ることができている証拠なのではないか</p> <p>ウ いない。3つの事例には納得できるけれど，「不利益」の説明をしているだけで，主張の「多様に見ることができる」については何も触れていない</p> <p>エ いない。事例2や事例3から筆者は自分の専門分野での例をメインにして論を進めていると感じる。「多様に見ることができる」と主張するならば，もっと幅広い視点での事例も挙げた方がよいと思う</p>	<ul style="list-style-type: none"> Google Jamboardを用いて判断型学習課題に対する考えを可視化することで，それぞれの立場やその根拠となる部分を確認し合いながら検討が進められるようにする 筆者の書きぶりの工夫に着目して意見を述べる子どもを価値づけることで，言語内容ではなく言語形式で語ることの重要性を感じられるようにする 	40
<p>3 本時の学習を振り返る</p> <p>本時の課題に対して，自分の考えが変わったこと，新たに気付いたことはあるか</p> <ul style="list-style-type: none"> 考えの形成 考えの言語化 	<p>ア 事例のわかりやすさばかりを気にしていたけれど，友達の見方を参考に，事例と主張の結び付きを考えて読むことで，主張につながる筆者の思いが表れている言葉に気付くことができた</p> <p>イ 3つの事例の順番が，身近な事例から段階を踏んで専門的な事例になるように工夫されていたので，筆者の主張が伝わりやすかった</p>	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りシートを用いて，自己評価と課題に対する考えを蓄積させることで，前時からの変容や，単元を通して獲得した新たな視点を自覚できるようにする 	50

(4) 評価規準と方法

事例が、主張とどのように結び付いているか吟味しながら、主張を伝えるための効果的な表現について、自分の考えを形成することができたか、発言やノートの記事からみとる。

<メモ>

1 単元 論の共通点を読み取り，より効果的な述べ方を探る

～『人工知能との未来』『人間と人工知能と創造性』（光村図書3年）～

2 指導の立場

<子どもの実態から>

子どもは，第二学年で学習した『君は「最後の晚餐」を知っているか』『最後の晚餐の新しさ』において，対象の魅力を伝えるための効果的な述べ方を比較しながら検討する活動を経験している。そこでは，筆者の強い思いのこもった表現や，比較対象を取り上げながら魅力を語る述べ方に着目し，より効果的で適切な表現を捉えたり問い直したりする中で，言葉への自覚を高めてきた。このような子どもが，二つの文章を読み比べながら論の共通点を捉えた上で，効果的な述べ方について検討できれば，筆者の工夫した表現の意図やよさを感じ，さらに言葉への自覚を高めていけるだろう。

そこで，単元を構想するにあたっては，次のような教材を設定する。

<教材について>

本教材は，現代を生きる私たちにとって至るところで欠かせない存在となっている人工知能について，人間が今後どのように付き合っていくべきかを，筆者がそれぞれの立場から述べている二つの論説文で構成される。ここでは，二つの論に共通して根底にある，「人工知能と付き合う中で人間が大切にすべきこと」についておさえた上で，異なる視点や，特徴的な述べ方を比較する。その中で，知識や語感を頼りに信頼性や客観性，説得力があるか否かを吟味しながら，より効果的な表現を捉えていけるようにしたい。

そこで，指導にあたっては，次の点に留意する。

<指導上の留意点>

- 第一次では，二つの文章を読み，論の共通点を捉えた上で説得力についての感想を共有する場を設定することで，述べ方の工夫に着目できるようにする。
- 第二次では，「説得力が高いのはどちらの筆者か」という課題を検討する場を設定することで，筆者の主張と論理の展開とを結び付けながら，効果的な表現を捉えたり，問い直したりすることができるようにする。
- 第三次では，理解したことや考えたことを，批評文にまとめる活動を設定することで，二つの文章を通して読み深めた，より効果的な表現を自覚することができるようにする。

3 目標

- (1) 話や文章の種類とその特徴について理解を深めることができる。 [知] (1)ウ
- (2) 文章の構成や論理の展開，表現の仕方について評価することができる。 [思] C(1)ウ
- (3) 文章を読んで考えを広げたり深めたりして，人間，社会，自然などについて，自分の意見をもつことができる。 [思] C(1)エ
- (4) 言葉がもつ価値を認識するとともに，読書を通して自己を向上させ，我が国の言語文化に関わり，思いや考えを伝え合おうとする。 「学びに向かう力，人間性等」

4 well-beingにつながる学びについて

本学園では、well-beingを「個人だけでなく、社会や地球環境まで含めた全体的に良好な状態」と捉えている。well-beingの実現には、教科等の本質に迫る授業で身に付けた資質・能力を、人生において自在に発揮できる子どもを育成することが必要不可欠である。そのためには、エージェンシー（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）の育成及び発揮が重要な課題であると考えられる。

本学園の国語部では、述べ方の効果や読後感の要因等を捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めていく子どもを育成する授業が、教科の本質に迫る授業だと捉えている。また、エージェンシーを発揮している姿を、言葉による見方・考え方を働かせている学びの過程を自覚する姿だと捉えている。本単元においては、「説明的文章を読み深めるために大切にしたい観点」を既習内容に基づいて設定し、その観点に対する自己評価と本時の課題に対する自分の考えを蓄積していく場を設ける。そうすることで、読者の立場と筆者の意図とを往還しながら、言葉にこだわろうとする様相が見られることを期待する。

このような学習を経験した子どもは、蓄積してきた自身の言葉への捉えを、これからの言語活動に活かそうとするようになり、well-beingの実現につながるだろう。

5 指導と評価の計画（総時数 6時間）

次	学習活動・内容	エージェンシーを発揮するための手立て	評価規準・評価方法等
○ ①	○ 説明的文章を読み深めるために大切にしたい観点を設定する ・既習内容の想起、確認	○ 観点を共有・決定させることで、既習内容を生かして作品を読む意識がもてるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>観察</u> ・既習内容から、考えを提案しようとしているかの確認
一 ②	○ 本文を通読し、初読の感想をもつ ・内容理解、構成把握 ○ 要点を整理し、二つの文章の主張と共通点を捉える ・説得力の高さと述べ方の工夫への着目	○ 観点に対する意識をもたせながら作品を読ませることで、課題への自分の考えをもてるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>ワークシート・観察</u> ・工夫された述べ方を見付けようとし、それを伝え合おうとしているかの確認 [知識・技能] <u>ワークシート・観察</u> ・話や文章の種類とその特徴について理解しているかの確認
二 ② 本時 2 / 2	○ 「序論と本論との結び付きに説得力があるのはどちらの筆者か」について検討する ・文章の構成 ・論理の展開 ● 「人間と人工知能との関わり方の述べ方に説得力があるのはどちらの筆者か」について検討する ・論理の展開 ・表現の仕方	○ 振り返りシートを用いて、毎時間の授業の最後に自己評価と考えを蓄積させることで、変容を自覚できるようにする ○ 振り返りシートからみとれる変容を価値づけることで、形成した考えをその後の学習につなげられるようにする	[思考・判断・表現] <u>Google Jamboard・振り返りシート</u> ・文章の構成や論理の展開、表現の仕方について評価することができているかの確認 [思考・判断・表現] <u>教科書・Google Jamboard</u> ・文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつことができているかの確認
三 ①	○ 二次で理解したことや考えたことを基に、「説得力があるのはどちらの筆者か」について批評文を書く ・根拠となる言葉や文の選択	○ 単元を通してつなげてきた学びを見返しながら活動させることで、目標を設定して学習することのよさや、必要性を感じられるようにする	[主体的に学習に取り組む態度] <u>ノート</u> ・今までの学習を生かして、粘り強く述べ方の工夫を見付け、その根拠・理由をまとめようとしているかの確認

6 本時案 ー第二次・2時分ー

- (1) 主眼 「人間に必要なことの述べ方に説得力があるのはどちらの筆者か」という判断型学習課題を検討することを通して、「人間」に対する筆者の見方や、利点と欠点の述べ方の工夫に気付き、自分の考えを形成することができる。
- (2) 準備 スクリーン、タブレット端末、振り返りシート
- (3) 学習の展開

学習活動・内容（発問）	予想される子どもの反応	指導上の留意点	分
<p>1 筆者の主張と、それを支える中心的な部分を確認する</p> <p>人間と人工知能との関わりについて何と述べているか</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時の学習への見通し 	<p>ア 羽生さんは、人工知能も人間も互いから学ぶことが必要だと述べ、そうすることが「より建設的」と言っている</p> <p>イ 松原さんは、「共同するのがよい」と言い切って、人間が判断力を養うことが大切だと述べている</p> <p>ウ 「共存」という点では根底にあるものは同じだけれど、述べ方も主張へのつなげ方も違って、松原さんのほうが強く感じる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ポイントとなる部分を並べて板書することで、比べる内容を明確にしたり、表現の特徴や違いに着目したりしながら検討できるようにする 	5
<p>2 判断型学習課題を用いて、より効果的な表現を検討する</p> <p>説得力があるのはどちらの筆者か</p> <ul style="list-style-type: none"> 論理の展開 事例の述べ方 	<p>ア 羽生さんは、「道もあるでしょう」「道もあるはずです」と述べていて、よりよくしていこうという思いが感じられ、「建設的」とつながる</p> <p>イ しかも、「うまく活用すれば」と、人工知能との共存の前提をしっかりと教えてくれていて、読者に寄り添っていている感じがする</p> <p>ウ それなら松原さんも、「高くなるはずである」「できるかもしれない」という述べ方で、「得意が異なる」部分をしっかりと説明している</p> <p>エ 「人間はすごい」という姿勢で述べているのも、読者は納得しながら読み進めることができる要素だ</p> <p>オ でも、松原さんが文末を曖昧にして述べているのは、人工知能の具体的な使い方に踏み込んでいる部分だから、「よい」と言い切っているなら、正確なデータなどがほしいと思う</p>	<ul style="list-style-type: none"> Google Jamboardを用いて判断型学習課題に対する考えを可視化することでそれぞれの立場や、その根拠となる部分を確認し合いながら検討が進められるようにする 相反する意見や似ている意見を意図的に取り上げることで、自分の意見を述べたり、他者の意見を聞いたり、さらに考えを広げたりする意欲を高められるようにする 文章を比較しながら、筆者の書きぶりの工夫に着目して意見を述べる子どもを価値づけることで、言語内容ではなく言語形式を根拠に語ることの重要性を感じられるようにする 	45
<p>3 本時の学習を振り返る</p> <p>本時の課題に対する自分の考えを最も支える表現はどこで、その理由は何か</p> <ul style="list-style-type: none"> 考えの形成 考えの言語化 	<p>ア 人間とコンピュータのことを順序よく述べている松原さんのよさがわかって、説得力につながっていると思えた</p> <p>イ 文末表現が同じだと思っていたけれど、確かに触れている内容が違っていると気付いて、内容理解がA+になった</p>	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りシートに、自己評価と課題に対する考えを蓄積させることで、前時からの変容や、単元を通して獲得した新たな読みの視点を自覚できるようにする 	50

(4) 評価規準と方法

論の中心となる部分のより効果的な述べ方を捉えたり，問い直したりしながら，「人間」に対する筆者の見方や，利点と欠点の述べ方の工夫に気づき，判断型学習課題に対する自分の考えを形成することができたか，発言や振り返りシートの記述からみとる。

<メモ>